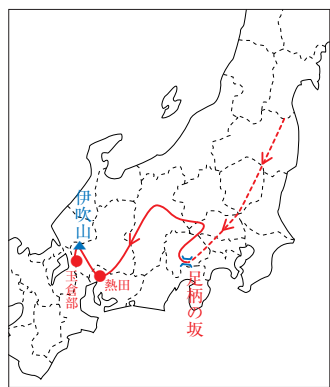




伊吹山の白猪



日本武尊は、都のある大和国（奈良県）への帰り道に、結婚の約束をしていた尾張国（愛知県）の美夜受比売のもとにお立ち寄りになりました。そして、腰につけていた草薙剣を比売のもとに置き、伊吹山の荒ぶる神を討ち取りに出かけられました。

尊が「この山の神は素手で討ち取ってしまおう」と言われながら山に登りはじめると、牛ほどもある大きな白い猪が現れました。尊は「この猪は山の神の使いだろう。今やつつけず、帰りに討ち取ってやろう。」と言われ、さらに山をお登りになりました。すると、急に氷のように冷たい雨が降り出し、尊の体を遠慮なく打ちのめしました。山の神の使いと思った白い猪は、実は山の神そのものでした。尊が言葉に出したため、それを聞いた山の神をすっかり怒らせてしまったのです。

痛めつけられた体をひきずるようにして山を下りられた尊は、伊吹山の麓にある玉倉部の清水にたどりつき、つめたい水を口にして、少し元気を取りもどされました。

そこで、その清水を「いさめの清水（目ざめ気づかせてくれた清水）」といいます。

考えてみよう

油断とは

○「いさめの清水」